自ら問う力 育む

やってみよう！「新聞でハテナソン」

新聞を教材に社会への疑問点を洗い出し、質問力を鍛えるグループワーク「新聞でハテナソン」が教育現場の注目を集めている。大学や中学校の授業だけでなく、教員研修でも活用されるようになってきた。背景には、若い世代が「質問しない」風潮に対する懸念がある。質問力を鍛える取り組みの実態を報告する。

（教育ネットワーク事務局）

はてな＋マラソン

ハテナソン　疑問を表す「はてな」と「マラソン」を組み合わせた佐藤賢一・京都産業大教授の造語。2020年度から始まる次期学習指導要領の柱「アクティブ・ラーニング（自ら問い、学ぶ）」を実現する新たな教育手法として注目されている。進め方は、米国の住民運動の指導者、ダン・ロスステイン氏著の「たった一つを変えるだけ」（新評論社刊）を参考にしている。ロスステイン氏は、貧困層の大人が、必要な情報と社会的支援を得られるような問いを発する力を身につけるために開発した。

教員研修で体験　杉並区

東京都杉並区は1月6日、小中学校の教員研修で「ハテナソン」を実施した。約50人の教員が「人工知能（AI）のあした」について特集した同日付の読売新聞朝刊の記事を読み、「AIに使われない子ども」をテーマに、質問を考えた。2020年度以降の学習指導要領では、自ら問い、学ぶアクティブ・ラーニングが小中高校の全教科で導入される見通しとなっている。その一つの試みとして、杉並区は「新聞でハテナソン」に注目、松本美奈専門委員に進行役を依頼、実現した。

参加した教員たちは、配布された同日付朝刊を手に、4人1組になって、まず記事を読む。一人ひとりが出来るだけ多くの質問を考え、それを書記役がボードに書いていく。

ハテナソンに臨み、質問をリストアップする教員たち（東京都杉並区の杉並区役所で）＝秋山哲也撮影

次に質問を改善する。「はい」か「いいえ」で答えられる「閉じた質問」から詳しい説明が必要な「開かれた質問」に書き換えていく。質問を書き換える過程で、「本当は何を聞きたかったのか」を改めて考えることが出来る。

最後に各班で優先すべき質問二つを選び出す。その際、「自分だったらこの質問にどう答えるか」と仮説を立てながら選び出すことが重要だ。

「AIを有意義に使っていくためには、何を学んだらよいのか」「思考力、表現力を豊かにして、自分の頭で考える人になるために必要なことは何か」――。

最終的に各班から出された質問には、子どもの現状に対する危機感がにじみ出ていた。

会場で研修を見守っていた井出隆安杉並区教育長は「AI開発を巡っては、進めるべきか否か、正解はない。何のためにあるのかを考え、新たな価値を見つけることが我々の使命で、そういう問題提起も出来たのが良かった」とコメントを述べた。

参加者からは、質問することによって「もっと知りたくなる」「考えが深まる」「主体的に学べる」などの感想が寄せられた。

その一人、碓井みづき・杉並区立和泉中教諭(36)は「疑問を持っていても解消の仕方がわからず、質問せずにそのままにしてしまう子どもたちが多い。子どもに質問の技術を伝えることで、アクティブ・ラーニングを推進していきたい」と話していた。

（竹内和佳子）

まずは教師から

関口修司・日本新聞協会NIEコーディネーターの話　とても面白いアクティブ・ラーニングの試みだった。子どもに質問させるには、まず教師自身が質問してみなければならない。教師たちは、質問を持つには知識が必要で、記者が取材を重ねて作った新聞を日々読んで知識を蓄えることが大切だ、と学べたと思う。

大学授業「質問出ない」

教室から消えた「書く」

「学生に質問させるだけで、何日もかかる」。最近、大学を取材するたびに教員から「質問しない学生」への嘆きを耳にする。先日も、ある国立大学工学部長が「学生が質問しやすいよう授業を工夫しているのに、なぜなのか」と焦燥感を募らせていた。

教員たちが現状を問題視するのは、学問はその字のごとく「問うて学ぶ」ことから始まるためだ。質問なくして、学問は成り立たない。酒井邦嘉・東京大教授（言語脳科学）は質問しない現状の理由として、学生が「書かなくなっている」ことを挙げる。

「授業中、ノートもとらない」。代わりにパソコンに打ち込んだり、板書をスマートフォンで撮影したりするのだという。

「書く」行為は、単に「パソコンに打ち込む」より、記憶させ、あるいは疑問を起こさせる点で優れていることは、米プリンストン大学の研究者らによって、既に解明されている。

「聞いた通りに打ち込む『受動的』な作業に対し、自分の言葉でキーワードを抜き出し、構成して書く行為は『能動的』だからだ」と酒井教授は説明する。便利さが質問力をそいでいるようだ。

世界を変える「？」

学生側だけではなく、小中学校などでの教育のありようにも問題がある、と指摘するのは、質問力をテーマに研修会を続ける塩瀬隆之・京都大准教授（工学）だ。たとえば、小中学校などでは授業の終盤になって、「何か質問ある人」と挙手を求める教員が多いが、これは、質問が出なければ終わり、質問がなくなるのが「ゴール」だと、無言のメッセージを送っていることになる。これでは、質問力が育つわけがないという。

塩瀬准教授の研修会では、疑問に答えを出して終わりではなく、一つの疑問からさらに多くの疑問を生み出す授業作りを提唱している。その目的で開くワークショップでは、目の不自由な人に動物園のシマウマやトラの姿をどう伝えるかといったテーマを盛り込む。

しま模様はタテかヨコか、全身か部分的か。誰かに説明しようとすれば、じっくり観察し、どうしたら伝わるか、どんな言葉が適切かを考えなくてはならない。一つの質問が分化していく過程こそが子どもの力を引き出すという。「『？』が、自分の見ていた世界を変える」と語っている。

想像力鍛える「紙」

次々に疑問を生み出す行為として何が効果的か。酒井教授は「書く」だけでなく「読む」を挙げ、媒体として本や新聞などの「紙」を重視している。

本や新聞には、インターネットと異なり、映像も音もない。「だからこそ、想像力や思考力を鍛えるには最高だ」と話す。本や新聞を読みながら、人間の脳は足りない情報を補って、あいまいな点や疑問を整理し、解決しながら自分のものにしているのだ。

酒井教授は「中でも新聞の利用価値は高い。大きさといい、1枚の紙に大量の記事が盛り込まれた一覧性といい、人の脳に最適なデザインだ」と強調する。

脳は自分の関心のある文字を、意識しなくても勝手に見つけ出す「自動検索」機能を持っている。「あの方は亡くなったのか」と紙面のすみの死亡記事を拾い出せるのは、その一例だ。「キーワード」の入力が必要で、しかもスクロールすると位置が変わる電子画面よりも、脳が行う検索には向いているというのだ。

インターネットを「流れるメディア」とするなら、紙媒体は「立ち止まるメディア」だ。立ち止まって、「あれ？」と首をかしげる。アクティブ・ラーニングの基本はここだろう。

（専門委員　松本美奈）

◆「新聞でハテナソン」の進め方